資格取得し責任ある仕事を

総合資格学院 若手建築家トークセッション

総合資格学院（岸和子学院長）は東京都内で若手建築家によるトークセッションを8日に開いた。1級建築士で構造設計1級建築士の円酒昂氏や、1級建築士の山田紗子氏と工藤浩平氏の3人が学生時代や働き始めてからの印象深い出来事、資格を取ることの重要性などについて体験を交えながら話した。

学生時代を振り返った工藤氏は、スイス連邦工科大学ローザンヌ校のキャンパス内にある学習センターの外観ポスターを見た時に衝撃を受けたという。建築家ユニット「SANAA」（妹島和世氏、西沢立衛氏）が設計を担当。曲線で構成する大胆なデザインが特徴で、「私が知っている建築は水平ではないといけなかった。『こんなに自由なんだ』と思った」と述べた。

学生の時はランドスケープデザインを学んでいたという山田氏は、設計事務所に入所してから建築を勉強し始めた。事務所の本棚に並んでいる本を1日1冊、通勤時間に読むことを自身に課した。ピラミッドから現代建築まで写真付きで解説する本を読んだ時、「（学生時代に）全然興味がなかった建築をやりたいというスイッチが入った」という。

トークセッションに参加した（左から）円酒氏、山田氏、工藤氏

円酒氏は構造設計事務所でのインターンシップ（就業体験）の経験を披露。仕事終わりに事務所の代表者と飲むことが多く、「学校外の面白い人と出会うのは一番刺激的だった」と振り返った。

「資格の重要性」がテーマになると、工藤氏は1級建築士の資格取得に向けた勉強を通じて専門外の設備や法規、構造に関する最低限の知識を習得していった。仕事面でもプラスになったという体験談を話した。

山田氏は試験科目の設計製図が「最初は落ちこぼれだった」と告白。エスキスを鍛えるため、小さいノートを持ち歩き、ことあるごとに描いていたら「ある時から合理的なゾーニングができるようになった」という。

構造設計1級建築士が目標だった円酒氏にとって、1級建築士の資格取得は通過点。苦労した製図試験は3回目で合格した。「構造設計は責任を取ることが仕事だ。責任の取れない人間は、基本的に言葉が弱くなる。自分の言葉を強くするために資格を取った」と資格取得に懸けた思いを語った。

国内で構造設計者の人数はまだ少ない。円酒氏は「日本はかなり優れた耐震技術を持っているので、興味があったら目指してほしい」と学生にエールを送った。

工藤氏は「好きなことは突き詰めてやる勇気を持ってほしい」と強調。「『これなら絶対負けないぞ』というものは友達と話さないと生まれない」とし、友人と語ることの重要性を学生に説いた。

「チャンスの神様は前髪しかない」と母親から言われてきた山田氏は「毎回『これってチャンスかな』と思うことが大事。ぜひチャンスをつかみにいってほしい」と締めくくった。

日刊建設工業新聞
2024年1月26日